



既視体験における離人感の特徴

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川部, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005292

既視体験における離人感の特徴

川部 哲也

I 問題と目的

1. はじめに

既視体験（デジャヴ体験；*déjà vu experience*）とは，“any subjectively inappropriate impression of familiarity of a present experience with an undefined past”と定義される（Neppe, 1983a）（足立ら（2001）による和訳は“過去との関連がない出来事に遭遇したときに生じる，すべての主観的で不適切な懐かしさの感情”）。具体的に換言すれば，初めての場面であるにもかかわらず，「まったく同じことが前にもあった」と感じる体験である。体験率は約80%であり，一般によく知られている主観的体験である。これまでに認知心理学，精神医学，脳神経学，文学など多様な学問領域により既視体験のメカニズムが考察されてきている（川部, 2004）が，筆者は臨床心理学の立場から既視体験の質的側面に着目し，研究を進めている。臨床心理学的観点からはFreud（1901）が，既視体験の分析によって無意識的願望を知ることができるという事例を挙げたように，既視体験が人間の深層意識に通じるものであると考えることができるだろう。

これまでに筆者は調査研究により，既視体験の主観的体験内容を構成するものとして，①離人感を伴う二重意識，②生き生きとしたfamiliarity，③言語化不能な圧倒的強烈さ，④予知できる感じ，⑤運命・縁がある感じ，⑥必然感，の6つがあることを示した（川部, 2006）。また，調査結果の考察により，既視体験が根源的な「つながり」や「ずれ」に関する深層意識的事態を開示している可能性があると考えられた（川部, 2010）。

一方で，既視体験の6つの主観的体験内容を見てもわかるように，既視体験は離人感などの精神病理的現象や，神秘的現象などと近接している体験であるが，これまでにそれらとの異同はあまり検討されてこなかった。よって，既視体験は多領域に対して漠然と広がりを持つ，位置づけの曖昧な体験となってしまう，他の深層意識的事態との関連が不明瞭な体験という印象を持たれやすくなっていると思われる。既視体験の位置づけを試みた先行研究においても，離人症（*depersonalization*）と関連するという論と，関連しないという論の両方が存在し，ますます既視体験の位置づけを難しくしていると考えられる。そこで本稿で

は，まず①筆者の2回の調査データを分析することにより，既視体験と離人感の関係を明らかにする。そして②その検討を通して浮かび上がる，既視体験における離人感の特徴を論じ，③既視体験によって意識に何が生じているのかを検討する。この3点が本稿の目的である。調査データの検討に入る前に，まず離人感を症状とする離人症の概念について概観し，既視体験と離人感との関係を調べた先行研究について見ていくこととする。

2. 離人症という概念

離人症（*depersonalization*）とは，「自分の知覚，感覚，行為などについての能動性の意識の変化で，生き生きとした実感のないことである（立山, 1998）」。Haug（1939）は，離人症の意識体験を3つに分類した。すなわち①外界意識の離人症（*allopsychische Depersonalisation*），②自己意識の離人症（*autopsychische Depersonalisation*），③身体意識の離人症（*somatopsychische Depersonalisation*）である。体験の例としてはそれぞれ，①周りと自分との間にベールがあるようで，外界が生き生きと感じられない，②自分が存在している感じがせず，生きている感じがしない，③自分の身体が自分のものと感じられない，などが挙げられる。

離人症が，種々の精神疾患や健常者にも見られる非特異的な症状群であることは多くの精神病理学者が述べている（木村, 1976）。ただし，離人症を独立した一疾患単位と認めるか否かには議論が分かれるところである（立山, 1998）。

また，安永（1987）は離人症の臨床形態として，①離人神経症，②内因性精神病（躁うつ病，統合失調症）に伴う離人症候群，③脳の器質的疾患ないし一般身体病に伴う離人症候群を挙げた。これはNeppe（1983b）が挙げた既視体験の4分類に対応すると考えられる。すなわち，心理的要因が大きい「主観的超常体験的既視体験」「連想的既視体験」は①離人神経症に対応し，精神病が大きい役割を演じる「統合失調症的既視体験」は②に対応し，「側頭葉てんかんの既視体験」は③に対応すると考えられる。このことから，臨床形態という点において，既視体験と離人症はよく似た現れ方をするといえよう。

3. 既視体験と離人感の関連

(1) 調査研究における既視体験と離人感の関係

既視体験に対する関心が高まったのは19世紀末、現在から100年以上前のことである。Bernard-Leroy (1898) は調査により、既視体験の体験時に離人感を伴っている場合があることを指摘した。Heymans (1904, 1906) は、既視体験と離人症体験の発生する条件（体験者のパーソナリティや体験環境）が類似していることを示し、既視体験の極端な形が離人症体験になると結論づけた。このHeymans調査の結果は統計的にも裏付けられることが確認された (Sno et al., 1993)。Myers et al. (1972) の調査においても、男性のみにおいてであるが、離人症体験あり群が離人症体験なし群よりも多くの既視体験を経験していたことが示された。このように、調査結果の多くは既視体験と離人感が関連することを示している。

しかし、別の結果も得られている。Brauer et al. (1970) による精神科病棟の入院患者を対象とした調査では既視体験と離人症体験との間には関連が見られず、両者は異なった体験であると結論づけられている。さらに、既視体験とその周辺現象についての質問紙IDEA (Sno et al., 1994) を用いた調査 (Wolfradt, 2000; Adachi et al., 2003) の因子分析において、既視体験が非現実感、離人感、未視感 (jamais vu; ジャメヴュ) とは別の因子に分類されるため、関連が低いという結果が得られている (ただし、IDEAのデータ分布は偏りが生じやすくほとんどが床効果となることから、この因子分析の妥当性には留保が必要であろう)。

既視体験が離人感に関連したりしなかったりという調査結果の非一貫性については、以下の2つの可能性が考えられる。すなわち、①既視体験の質的側面を考慮していなかったことによる問題 (川部, 2006)、あるいは②離人症体験の質的側面を考慮していなかったことによる問題の2つの可能性である。既視体験における離人感を探究するためには、既視体験、離人感ともに質的に検討する必要があることが示されているといえよう。

(2) 精神分析学における離人症論

Freudがロマン・ロランに宛てた書簡において、自身の離人感に言及しつつ、既視体験について論じている箇所がある。

「一方、これら (疎隔感) とは正反対の、いわば肯定的な反応を認めることができる現象、いわゆる「人物誤認」とか「既視感」「既述感」といった現象もありますが、これらは何かあるものを自分の自我の一部と見なしてそれを受け入れようとする錯覚で、疎隔感

の場合に何かを自分から締め出そうと努力するのは、ちょうど逆の現象です」(Freud, 1937/1984; p268)。

ここでは、既視体験は、疎隔感とは正反対の現象であると述べられている。ここで論じられている疎隔感とは、①未視体験 (ジャメヴュ) を含む外界意識の離人症と、②自己意識の離人症といった2種類の形式が想定されており (前掲; p268)、離人感とはほぼ同義と見てよい。つまり、既視体験と離人感では、前者が自我に受け入れる動きであり、後者が自我から締め出す動きであるといった、正反対の力動が生じていると想定された。このことからただちに両者の関係がどうなっているかを論じることは困難であるが、両者を一对の対立現象として位置づけたことは興味深い。

一方で、Oberndorf (1941) は分析例から、既視体験も離人症も内的脅威を減少させる点において、同じ防衛機制であると考えた。

以上より、既視体験と離人感について「正反対」と見るか、「同じ防衛機制」と見るかという両方の観点から精神分析にもあることがわかる。

(3) 日本の精神病理学における離人症論

日本の精神病理学においては、早くから新福・池田 (1954) によって、未視現象と既視現象の両方が離人症の一部として出現すると指摘されている。そして近年、大饗ら (2001) によって、非精神病性の離人症として従来記載されてきたもののうちに、「内省過剰型」と「体験没入型」という構成の異なる二つの離人症があることが指摘されている。前者は離人神経症に一致している古典的なタイプであるのに対し、後者はある状況に過剰に没入することによって、日常の現実世界に関与できなくなっているという、解離に近似したタイプと考えられている。柴山 (2007) は、解離性障害を論じる中で、「解離の離人症には解離特有の離人症がある」(p36) と述べている。また「解離の患者はこのデジャヴュを幼少期から頻繁に体験していることが多い」(p63) と臨床経験を手がかりに論じた箇所もある。これらのことから、離人感が一義的なものではなく広がりをもったものであること、そしてその広がりの中で既視体験との関連を論じることの必要性が示唆されているといえる。

4. 目的

本稿の目的を繰り返すと、以下の3つとなる。

- 1) 筆者の2回の調査データを分析することにより、既視体験と離人感の関係を明らかにする。
- 2) その検討を通して浮かび上がる、既視体験における離人感の特徴を論じる。

3) 既視体験によって意識に何が生じているのかを検討する。

II 方法

1. 第一調査 (川部, 2006)

【調査協力者】大学生・大学院生200名(男性73名, 女性127名, 平均年齢22.0歳)

【調査時期・場所】1999年10月～11月 大学内の講義室

【手続き】以下の3つの尺度, および既視体験頻度についての質問から構成される質問紙調査を施行した。

① 既視体験内容尺度 (Déjà vu Contents尺度, 以下DC尺度と略記) (41項目): 既視体験の最中に主観的に感じられた体験内容を調査する尺度。調査協力者自身の最も印象に残っている既視体験の内容を, 準備段階を経た後に想起し, 自由記述してもらった。そして「その体験をしている最中, 自分がどのように感じたか」という質問文を呈示し, その体験内容をDC尺度によって評定させた。なお, 回答方法は「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「とても当てはまる」の5件法を用いた。

② 既視体験解釈尺度 (Déjà vu Interpretation尺度) (25項目): 既視体験をどのように解釈するかを調査する尺度。今回は紙数の都合で分析を省略する。

③ 離人尺度 (12項目+ダミー4項目): 予備調査 (関西地区の大学生・大学院生・専門学校生96名; 男性41名, 女性55名) を経て, 普段の状態における離人感の体験頻度を測定する尺度を作成した。尺度項目はJacobs et al. (1992) による離人尺度を参考に12項目が選定された。予備調査において, この離人尺度得点は, 日本語版DES (田辺ら, 1992) の離人因子得点と中程度の正の相関 (Pearsonの相関係数 $r=.580$, $p<.01$) が得られたため, この離人尺度の構成概念妥当性は一応確保されたと考えられる。なお, この尺度は「全くない」「あまりない」「どちらともいえない」「時々ある」「よくある」の5件法を用いた。すなわち, この尺度は離人感を体験する頻度を測定している。離人感の強度や質的側面については測定しておらず, 比較的日常的に体験しう程度の離人感を測る尺度となっている。

2. 第二調査 (川部, 2008)

【調査協力者】大学生237名(男性88名, 女性149名, 平均年齢20.9歳)

【調査時期・場所】2005年10月～12月 大学内の講義室

【手続き】以下の2つの尺度から構成される質問紙調

査を施行した。

① 改訂版既視体験内容尺度 (以下改訂DC尺度と略記) (43項目): より幅広く, 既視体験の主観的内容を抽出するために, DC尺度に恐怖や不安などnegativeな感情体験を新たに加えた尺度。

② 日本語版既視体験評価尺度 (Inventory for Déjà vu Experiences Assessment; IDEA) (足立ら, 2001): 既視体験について定量的に検討しようとSno et al. (1994) が作成した尺度の日本語版。この尺度は2つのパートから成っており, Aパートは既視体験とそれに関連する精神現象の頻度を尋ねる質問群 (9項目: 既視感・非現実感・未視感・予知夢・離人感・超常感・夢の再認・旅行経験・白昼夢) から成り, Bパートは既視体験を体験したことがある人のみ回答するもので, 調査協力者自身の既視体験の特徴について尋ねる質問群 (14項目) から成る。今回は紙数の都合でAパートのみを分析対象とする。中でも離人感に密接に関連するのは「非現実感」「未視感」「離人感」の3つの項目であるので, それらを中心に分析を行う。

III 結果と考察

1. 第一調査の分析

(1) 離人感の頻度と既視体験の頻度の関係

まず, 離人尺度について因子分析を行い, 1因子構造と捉えられることを確認した (表1)。離人尺度におけるCronbachの α 係数は.824であり, 内的一貫性を持っていると考えられたため, この尺度の素点合計を離人得点として算出した。

表2より, 全調査対象者200名を離人得点の中央値32を基準として離人感頻度高群と離人感頻度低群の2群に分け (離人得点中央値の人と, 回答に不備のあった人を除くと分析対象者は182名となった), 離人感頻度と既視体験頻度についての χ^2 乗検定を行った結果, 有意な関連は見られなかった。つまり, 離人感の頻度は, 既視体験の頻度と関連しないことが示された。

(2) 離人感の頻度と既視体験内容の関係

DC尺度について, 自身の既視体験を想起することができた調査協力者136名を分析の対象とし, 主因子法Promax回転の因子分析を行った結果, 6つの因子 (①離人感を伴う二重意識, ②生き生きとしたfamiliarity, ③言語化不能な圧倒的強烈さ, ④予知できる感じ, ⑤運命・縁がある感じ, ⑥必然感) が抽出された。分析の詳細は川部 (2006) を参照のこと。

次に表3より, 調査協力者のうち既視体験の記述を行った136名 (回答に不備のあった5名を除くと, 分

表1 離人尺度の因子構造（主成分法）（N=197）

No.	質問項目	因子負荷量
7	まるで自分の身体が自分の一部ではないかのように、自分と身体が分離しているように感じることもある。	0.716
14	親しんだものが、自分と遠く隔たっているように見える、または不自然に見えると感じたことがある。	0.694
11	自分の過去に体験したことが、自分に起こったこととは感じないことがある。	0.638
2	今感じられている感情を経験しているのは、自分ではないと感じたことがある。	0.632
6	自分の周りの物事がいつもと違って見えることがある。	0.611
13	自分が故意に嘘をついたわけではないのに、自分が発した言葉が本物ではないように感じることもある。	0.605
5	自分を見知らぬ人のように感じることもある。	0.600
1	自分と他の人や、自分と世界との間が、ガラスの壁で隔たっているように感じることもある。	0.598
4	自分自身と自分の周囲の物体との区別ができなくなると感じることもある。	0.524
15	神秘的な気持ちになった時に、自分が自分から遠ざかったように感じることもある。	0.474
12	友人や知人が変わってしまって、なじみがなくなったように見えることがある。	0.462
8	人を見て、その人が本当に生きた人間であると感じられないことがある。	0.457
因子寄与		4.180

表2 離人頻度と既視体験頻度（第一調査）

	N	全くない	あまりない	どちらとも いえない	たまにある	よくある
離人頻度高群	94	6	10	8	57	13
離人頻度低群	88	11	11	8	49	9

表3 離人頻度とDC尺度因子得点の相関（N=131）

	離人因子	快因子	圧倒因子	予知因子	縁因子	必然因子
離人頻度	.438 **	.058	.123	.058	.082	.087

** p<.01

析対象者は131名となった）について、離人感頻度とDC尺度の標準因子得点との関連をPearsonの相関係数を用いて分析したところ、離人感頻度と「離人感を伴う二重意識」因子得点において中程度の正の相関が見られた（ $r=.438, p<.01$ ）。他の因子については有意な相関が見られなかった。よって、離人感頻度が高い人は、「離人感を伴う二重意識」を既視体験時に体験する傾向が高いことがうかがえる。

(3) 第一調査の考察

上記の2つの分析により、離人感頻度の高さは、①既視体験の頻度には関連しないが、②既視体験の主観的内容には関連する（離人感頻度が高い人は、既視体験時の離人感が強い）という結果が示された。この結果の解釈として、離人感頻度の高い人にとっては、既視体験時に自らの持つ離人傾向が顕在化しやすいため、離人感を伴う既視体験が生じやすい可能性がある、と以前に筆者は考察した（川部, 2008）。しかし、それ以外の解釈もありうるのではないか。つまり、離

人感頻度の高い人と低い人の中には、既視体験に質的な相違があるという可能性が考えられる。

2. 第二調査の分析

(1) 離人感の頻度と既視体験の頻度の関係

まず、IDEAのAパートについて、全調査対象者237名のうち、回答に不備のない233名を分析対象とし、平均値と中央値をそれぞれ求めた（表4）。9項目中、4項目において中央値が最低値である1を示しているため、因子分析には不適と判断された（なお、Adachi et al. (2003)においても、同様に5項目において中央値1となっているので、今回の結果は先行研究にほぼ一致している）ため、因子分析は行わずに項目ごとに検討を行うこととする。既視体験の頻度と、IDEAのAパート残り8項目との関連を、Spearmanの順位相関係数を用いて検討したところ、非現実感（ $r_s=.257$ ）、正夢（ $r_s=.386$ ）、離人感（ $r_s=.313$ ）、夢の再認（ $r_s=.193$ ）、旅行経験（ $r_s=.142$ ）が有意な正の相関を示した。なお、未視感との間には有意な相関が見られなかった

表4 IDEA項目ごとの平均値と中央値 (N=233)

	平均値	中央値
既視感	2.53	3
非現実感	1.96	2
未視感	1.76	1
予知夢	1.97	2
離人感	1.63	1
超常感	1.28	1
夢の再認	3.38	4
旅行経験	2.79	3
白昼夢	1.33	1

(rs=.088)。よって、離人感を示す3項目のうち、非現実感や離人感が既視体験頻度と関連し、未視感は関連しなかった。

(2) 離人感の頻度と既視体験内容の関係

改訂DC尺度について、回答に不備がなく、自身の既視体験を想起した149名を分析の対象とし、床効果が見られた7項目を除外した上で、第一調査と同様の手法により主因子法Promax回転の因子分析を行った結果、5因子解が最も各因子の内容を説明するのに妥当であると判断された。抽出された5因子は、DC尺度の因子と多少順序は異なるが、ほぼ同じ因子が抽出され、それぞれ①離人感を伴う二重意識、②生き生きとしたfamiliarity、③予知できる感じ、④運命・縁がある感じ、⑤言語化不能な圧倒的強烈さと命名された。DC尺度においては「必然感」という第6因子が抽出されていたが、改訂DC尺度ではこの因子は抽出されなかった。もともと必然感因子は3項目と少なく、因子としての信頼性が乏しいことが原因として挙げられよう。なお、改訂に際して追加したnegative感情についての項目はすべて床効果と判定されたため、因子分析の対象とはならなかった。以上より、改訂DC尺度においても、DC尺度とほぼ同様の因子構造であることが示された。

次に表5より、上記の149名のうち、回答に不備の

ある3名を除いた146名について、IDEAの離人感関連現象の頻度と改訂DC尺度の標準因子得点との関連をSpearmanの順位相関係数を用いて分析したところ、非現実感頻度と離人感頻度が、「離人感を伴う二重意識」因子得点と弱い正の相関があった(それぞれrs=.300, p<.01; rs=.282, p<.01)。また、未視感頻度は「言語化不能な圧倒的強烈さ」因子と弱い負の相関が得られた(rs=-.177, p<.05)。よって、非現実感の頻度が高い人と、離人感の頻度が高い人は、「離人感を伴う二重意識」を既視体験時に体験する傾向が高かった。ただし、未視感頻度が高い人はそのような傾向は見られず、「言語化不能な圧倒的強烈さ」が低い傾向があった。

(3) 第二調査の考察

第一調査の結果と同様に、離人感頻度が高い人ほど、既視体験時に離人感を伴う二重意識を体験しやすいという結果が得られた。2つの調査によって支持されたこの結果は比較的信頼性があると考えてよいだろう。

一方、一致しなかった結果もある。第一調査では離人感頻度と既視体験頻度が関連しなかったのに対し、第二調査では未視感以外の2項目の離人感頻度と既視体験頻度の間に正の相関が見られた。なぜ2つの調査で異なった結果が生じたのだろうか。

第一の理由として、離人感頻度の測定方法の相違が影響している可能性が考えられる。第一調査の離人感頻度は、自作の離人尺度12項目を用い、正規分布が前提となる測定方法であるのに対し、第二調査の離人感頻度は、1項目による測定であり、分布の偏りが大きくなってしまっていた。第二調査で用いたIDEAは非臨床群における離人感を測定するには不向きであったかもしれない。しかし、別の理由も考えられる。

第二の理由として、測定する離人感の性質が異なっていたためである可能性が考えられる。第一調査の離人尺度は、多様な離人感を総和した離人感一般を測定していたが、第二調査では限定された離人感を測定していたと思われる。第二調査で使用されたIDEAの非現実感を測定する教示文は、「あなたはこれまでに、周囲のことがまるで現実のものではない、あるいは実

表5 離人関連現象の頻度と改訂DC尺度因子得点の相関 (N=149)

	離人因子	快因子	予知因子	縁因子	圧倒因子
非現実感頻度	.300 **	.057	.139	.053	.019
未視感頻度	.009	-.022	-.035	-.077	-.177 *
離人感頻度	.282 **	.163	.169	-.069	-.050

** p<.01

* p<.05

際に起こったことではないように感じたことがありますか?」となっており、離人感の教示文は「あなたはこれまでに、実際に自分に起こっているのに、自分ではなく他人に起こっているかのように感じ、まるであなた自身を別の自分が見ているかのように感じたことがありますか?」となっている。前者は「現実感消失 (derealization)」を示していると考えられる。そして後者は「行為する身体」と「観察する自己」が分離した事態を示しており、安永 (1987) の述べる「二重意識」に通じる事態であると考えられる。このことから、この二つの項目は精神病的な離人症に近い離人感を示しており、日常的な感覚とずれた異様な感覚を伴う、非日常的な離人感であるということができらる。よって、第一調査の離人感は日常的な離人感であるのに対し、第二調査は非日常的な離人感であるといえる。つまり日常的な離人感の体験しやすさは既視体験の頻度に影響しないが、非日常的な離人感の体験しやすさは既視体験の頻度に影響するということになる。

ここで問題が一つ残る。IDEAの離人感を示す項目の一つである未視感頻度は、既視体験頻度と関連しなかった点である。未視感についての教示文を見ると、なぜか「この質問は「見覚えがある」とは反対の感じについてのものです」という前書きがついている。この前書きは既視感と未視感とが反対の関係にある、という先入観を与える誘導的な文章であり、この影響で、あったはずの正の相関が消えてしまった可能性があると考えられる。実際には非日常的な離人感の1つである未視感と既視体験には関連があったのではないかと推測される。

以上より、単なる日常的な離人感の体験しやすさは、既視体験の頻度と関連しないが、非日常的な離人感の体験しやすさは、既視体験の頻度を高くしていることが示唆される。先行研究をみると、精神科入院患者の離人感頻度と既視体験頻度に関連が見られなかった (Brauer et al., 1970) のに対し、大学生のそれぞれの頻度には男性において関連が見られた (Myers et al., 1972)。一見、これらの結果は本稿の結果と相反するように思われる。なぜなら、精神科患者の離人感是非日常性が高いと考えられるのに既視体験と関連せず、大学生の離人感是非日常性が高いと考えられるのに既視体験と関連するという、本稿の結果とは正反対の結果が導かれたように見えるからである。しかし、離人感の測定方法の詳細を見てみると、Brauer et al.の調査では離人感 (depersonalization) と現実感消失 (derealization) と既視感 (déjà vu) をまとめて49項目の質問紙によ

て測定していた。一方でMyers et al.は、離人感の基準を設け、その基準に一致したエピソードを記述した人を離人感ありと判定した。つまり、前者は離人感一般を、後者は限定された離人感を測定しているのである。これは、離人感一般 (日常的な離人感を体験する傾向) は既視体験に関連せず、特定の離人感 (非日常的な離人感を体験する傾向) は既視体験に関連することになり、本稿の分析結果に一致すると考えられる。

3. 総合考察

2つの調査データの分析により、以下のことが明らかになった。①日常的な離人感の頻度は、既視体験の頻度に関連しない一方で、非日常的な離人感の頻度は、既視体験の頻度に関連する。②離人感の種類を問わず、離人感頻度が高い人ほど、既視体験時に「離人感を伴う二重意識」を体験しやすい。

①より、既視体験における離人感は、日常的な離人感とは異なるということがわかる。なぜなら、もしこの両者が混同されるほど類似しているならば、既視体験頻度と日常的な離人感頻度との間に正の相関があると考えられるのに、調査結果はそれを支持していないからである。よって、既視体験における離人感是非日常的なものであると考えられる。

では、日常的な離人感であれ非日常的な離人感であれ、普段から離人感をよく体験する人は、既視体験にも離人感を伴うことが多い、という②の結果をどのように考えれば良いのか。これは、既視体験における感覚が言語化不能であるため、その感覚を言語化しようとすると、自らの体験したことのある離人感を参照するためではないかと考えられる。既視体験における離人感は、言語化不能な圧倒的強烈さと比較的強い相関 ($r=.531$) を持っている (川部, 2006)。ある調査協力者は、既視体験時の感覚を「自分の脳の一部がどこかにぐいと引きずり出されて、自分の知らない記憶を埋め込まれてしまったような不安」と表現した。これは既視体験時の感覚を無理に言語化すると異様な表現になってしまうケースである。このような異様な表現を用いた「言語化」の代わりに、離人感として「言語化」される場合もあるのではないだろうか。よって、既視体験における離人感は、離人感と呼ばれる以前の、ある異様な根源的感觉であるのかもしれない。そもそも既視体験の離人感は、生き生きとしたfamiliarityと正の相関をもつ (川部, 2006)。これは考えてみると不思議な事態である。つまり、現実感が消失していて、かつ同時に生き生きと鮮やかであるという、逆説を含

んだ事態である。今回の調査結果は、既視体験がパラドキシカルな構造をもった、深層意識の事態であることを支持していると考えられる。

最後に、二重意識について考察する。既視体験における離人感には、しばしば「自分を見ているもう一人の自分がいる」という二重意識が伴うことがある。これを以前筆者は、安永（1987）の理論を援用して離人症と等価のものとして位置づけたことがあった（川部，2006）。しかし、安永の描写した二重意識は、行為する自己と観察する自己の分離に絶えず直面し、苦悩することが前提としてあるが、筆者の調査した限り、既視体験における二重意識には、その苦悩が見られることはほとんどない。つまり、既視体験における二重意識は古典的な離人症に伴うものとは明らかに異なる。むしろ、大饗ら（2001）のいう「体験没入型」、すなわち解離に近い離人症の感覚に近いと考えられる。大饗らによると、「体験没入型」の離人症には、行為する自己と観察する自己との間に苦悩や葛藤がなく、どちらの自己もぼんやりとしていると描かれているが、これは既視体験の二重意識のあり方にとても近い。そして、柴山（2007）の、解離の患者に既視体験が多いという指摘とも通じると考えられる。今後、既視体験と解離との関連について考察する必要があるが、解離という概念自体に曖昧さが含まれているので、慎重に論を進めたい。これは今後の課題である。

IV 結論

本稿で得られた結論は、①既視体験における離人感とは、日常的なものではなく、非日常的なものであること。②既視体験における根源的な感覚を言語化したものの一つとして、離人感という表現形態を取りうるということ。③既視体験における離人感に伴う二重意識は、古典的な離人症性のものではなく、解離に近縁の現象（大饗ら（2001）のいう「体験没入型」の離人症に近縁の現象）であるということ。以上の3点が明らかになったと考えられた。

文献

足立直人・足立卓也・木村通宏・赤沼のぞみ・加藤昌明（2001）：既視感（*déjà vu*）体験評価尺度日本語版の作成とその妥当性の検討。精神医学，43，1223-1231。

Adachi, N., Adachi, T., Kimura, M., Akanuma, N., Takekawa, Y., Kato, M. (2003) : Demographic and psychological features of *déjà vu* experiences in a nonclinical Japanese population. *The Journal of Nervous and Mental Disease*,

191, 242-247.

- Bernard-Leroy, E. (1898) : *L'Illusion de fausse reconnaissance. Contribution a l'etude des conditions psychologiques de la reconnaissance des souvenirs.* France: Paris, Alcan.
- Brauer, R., Harrow, M., Tucker, G.J. (1970) : Depersonalization phenomena in psychiatric patients. *British Journal of Psychiatry*, 117, 509-515.
- Freud, S. (1901) : *Zur Psychopathologie des Alltagslebens.* 高田珠樹（訳）（2007）：日常生活の精神病理学にむけて。フロイト全集7。岩波書店。
- Freud, S. (1937) : *Eine Erinnerungsstörung auf der Akropolis.* 佐藤正樹（訳）（1984）：アクロポリスでのある記憶障害。フロイト著作集11。人文書院，pp.262-270。
- Haug, K. (1939) : *Depersonalisation und verwandte Erscheinungen.* Bumke, O.(Ed) *Handbuch der Geisteskrankheiten, Erg. Bd. I*, Berlin: Springer.
- Heymans, G. (1904) : *Eine Enquête über Depersonalisation und 'Fausse Reconnaissance'.* *Zeitschrift für Psychologie*, 36, 321-343.
- Heymans, G. (1906) : *Weitere Daten über Depersonalisation und 'Fausse Reconnaissance'.* *Zeitschrift für Psychologie*, 43, 1-17.
- Jacobs, J.R., Bovasso, G.B. (1992) : *Toward the clarification of the construct of depersonalization and its association with affective and cognitive dysfunctions.* *Journal of Personality Assessment*, 59, 352-365.
- 川部哲也（2004）：既視体験研究の歴史。京都大学大学院教育学研究科紀要，50，399-412。
- 川部哲也（2006）：既視体験における主観的体験内容についての一考察。心理臨床学研究，24，99-109。
- 川部哲也（2008）：既視体験に関する心理臨床学的研究。京都大学博士学位論文（未公開）。
- 川部哲也（2010）：日常場面における既視体験の特徴——初場面既視体験との比較検討——。大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，3，17-24。
- 木村敏（1976）：離人症。現代精神医学大系3-B 精神症状学，中山書店，109-143。
- Myers, D.H., Grant, G. (1972) : *A study of depersonalization in students.* *British Journal of Psychiatry*, 121, 59-65.
- Neppé, V.M. (1983a) : *The concept of déjà vu.* *Parapsychological Journal of South Africa*, 4, 1-10.
- Neppé, V.M. (1983b) : *The Psychology of Déjà vu: Have I Been Here Before?* Johannesburg: Witwatersrand University Press.

- 大饗広之・阿比留烈・土門祐二 (2001) : 二つの離人症
——記述現象学的立場からの再考——. 精神神経
学雑誌, 103, 411-425.
- Oberndorf, C.P. (1941) : Erroneous recognition. *Psychiatric
Quarterly*, 15, 316-326.
- 柴山雅俊 (2007) : 解離性障害——「うしろに誰かいる」
の精神病理. 筑摩書房.
- 新福尚武・池田数好 (1954) : 人格喪失感 (離人症). 井
村恒郎ほか (編) 異常心理学講座 第2部D(4), み
すず書房.
- Sno, H.N., Linszen, D.H. (1990) : The déjà vu experience:
remembrance of things past?, *American Journal of
Psychiatry*, 147, 1587-1595.
- Sno, H.N., Draaisma, D. (1993) : An early Dutch study of
déjà vu experiences. *Psychological Medicine*, 23, 17-26.
- Sno, H.N., Schalken, H.F.A., de Jonghe, F., Koeter,
M.W.J. (1994) : The inventory for déjà vu experiences
assessment. *The Journal of Nervous and Mental
Disease*, 182, 27-33.
- 田辺肇・小川俊樹 (1992) : 質問紙による解離性体験の
測定. 筑波大学心理学研究, 14, 171-178.
- 立山萬里 (1998) : 離人症. 松下正明 (編) 臨床精神医
学講座第1巻. 中山書店, pp.196-207.
- Wolfradt, U. (2000) : Déjà vu-Erfahrungen: Theoretische
Annahmen und empirische Befunde. *Zeitschrift für
Klinische Psychologie, Psychiatrie, und Psychotherapie*,
48, 359-376.
- 安永浩 (1987) : 離人症. 土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・
木村敏 (編) 異常心理学講座 (第3次) 第4巻. みす
ず書房, pp.213-253.